



八王子盲学校だより



令和8年2月発行 第10号
東京都立八王子盲学校長 田島 由紀子



花咲く前の時間

副校長 落合 隆一

3学期に入り、寒さの厳しさを感じるようになりました。特に朝晩は、吐く息の白さ、刺すような空気の冷たさを感じます。けれども、東門から玄関までのアプローチにあるプランターの植物をよく見ると、春に向けた確かな育ちを感じます。葉がすべて落ちている桜の木も、芽吹きに向けて力を蓄えているように見えてきます。春はまだ遠いように感じられますが、準備はもう始まっているのだと思います。

春には華やかに咲き誇る花も、咲くときだけが大切なものではありません。見えないところで根を広げ、寒さに耐え、芽やつぼみを育てる時間も、とても大切です。結果だけでなく、その過程に価値があります。これは、私たちの勉強や成長も同じです。

学校生活で幼児・児童・生徒が取り組んでいる学習は、すぐに結果が表れることばかりではありません。何度も繰り返す練習、地道で基礎的なトレーニングなどは、成果としては表れにくく、学校からお渡しする評価にも、目立って記載されるものではないかもしれません。しかし、その積み重ねがあるからこそ、「できた」「わかった」という瞬間が訪れます。テストの点や大会の結果は短い時間のものですが、その結果を支えているのは、見えない努力の時間です。

大切にしたい視点としては、「結果のために努力する」のではなく、その努力に意味を見付けることです。毎日少しずつ、昨日より一歩前へ進むこと。ノートを一行多く書く、もう一回だけ練習する、人の話を最後まで聞く——そんな小さな積み重ねが、強い根を作り、倒れない幹を育てます。コツコツと取り組むことそのものに価値があるということに気付き、継続して取り組んでいける力を育てていけるよう、学校としても結果のみにこだわることなく、小さな積み重ねを大切にしていきたいと考えています。

現行の学習指導要領に基づく観点別学習状況の評価では、「主体的に学習に取り組む態度」という観点が設けられ、粘り強く学習に取り組む姿勢や自ら学習を調整しようとする姿を評価するものとされています。特別支援教育においては、その点を各教科の評定で評価していただくだけでなく、個別指導計画を作成し、個に応じた目標や手立てを共有しながら指導を進めています。こうした指導と評価の一体化の取組は、いわば特別支援教育が先行して取り組んできたことであり、学びに向かう過程（プロセス）をしっかりと見て、良いところを伸ばしていこうとする教育実践は、今後も大切にしていきたいと考えています。

2月に入ると、学年のまとめや進学・卒業に向けた取組も本格化し、学校全体が少しそわそわした雰囲気になります。それに飲まれてしまうと、あっという間に年度末まで過ぎてしまいそうですが、これまで少しずつ積み上げてきたものをあらためて振り返り、その努力が確かな成長として表れていることを、幼児・児童・生徒の皆さんには感じてほしいと思います。あと2か月、これまで継続してきたことを大切にしながら、学年のしめくくりをしていきましょう。

スポーツ部報告

スポーツ部顧問(川嶋 拓)

スポーツ部は仮設校舎への移転により、これまで当たり前だった体育館での活動ができなくなりました。環境の変化は大きな試練でしたが、八王子特別支援学校の体育館を借りたり、屋上の人工芝で工夫を重ねたりしながら、練習を続けてきました。6月の関東地区フロアバレーボール大会では、主力であった理療科生が参加できず、急遽中学部・普通科主体のチームで挑戦することになりました。練習不足や試合経験の不足は否めませんでしたが、選手一人ひとりが大会特有の緊張感の中、全力でプレイし、試合を楽しむことができました。

大会後、進路活動に専念するために3年生が引退し、部員数は大きく減少しました。複数種目の並行活動が難しくなったため、近く行われる大会種目に集中して取り組む方針に変更しました。その結果、関東地区卓球大会では中学生男子の部で1位、関東地区陸上大会では中学生女子50m走2位、中学生男子100m走3位と、努力の証となる成果を残すことができました。

種目を絞った練習で体力が付き、フロアバレーボールの基本プレイも正確になり、プレイする楽しみがさらに広がっています。施設的な制約は決して小さくありません。しかし、「楽しい」という気持ちを原動力に、これからも前向きに挑戦し続けたいと思います。

今だけの景色

校舎改築プロジェクト(野村 利己)

新校舎の起工が遅れており、お伝えする新しい情報はありません。そこで今回は、校舎周辺の昔の様子について少し触れてみます。

仮設校舎の東門から寄宿舎に向かうなだらかな坂をのぼり、その途中でうしろを振り返ると、この坂道の延長線上は、学校の敷地を越え、さらに西方向に一直線上に道路が延びている様子がわかります。私は以前から学校周辺を撮影した昔の航空写真を見て、そのことを不思議に感じていました。

そこで、昔の様子を知っている理療科のS先生にお話を伺いました。昨年解体した旧校舎のさらに前の時代に建っていた校舎は3棟に分かれていて、そのうちの中央の棟と南の棟との間が、先ほどの坂道と西方向に向かう道路と繋がっていたそうです。昭和40年代、八盲の小学生だったS先生の記憶では、敷地内を東西に抜けるこの道を一般の自転車やオートバイが時折通ったりしていたとお話されていました。今では考えられないようなのかな時代でした。現在の校地は立川吉五郎氏と関山専吉氏がそれぞれ所有していた土地を寄贈されてできたものですが、二つの所有地がどのような区画で統合されたのか、敷地内を通り抜けることができた道が元々は公道だったのかどうか、今回は確認できませんでした。

今しか見られない風景を懐かしみつつ、新校舎が街にどのように馴染んでいくのか想像しています。そして、一日も早く建設工事が始まることを願っています。新校舎の模型や完成予想図(外観)が仮設校舎1階玄関に展示していますので、じっくり御覧ください。



【昭和20年代後半から40年代前半まで使用していた校舎】